

2023 **1/14** 土

▼
3/26 日

本庄早稲田の杜ミュージアム企画展
第3回本庄早稲田の杜地域連携展覧会

会 場

早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター
(早稲田大学 93号館) 2階情報資料室

所在地

埼玉県本庄市西富田1011

児玉・深谷地域の

古墳と副葬品

開館時間

午前9時～午後4時 30分

休 館 日

月曜日(休日の場合は翌日)

入 館 料 無料

共 催

本庄市教育委員会
美里町教育委員会
神川町教育委員会
上里町教育委員会
深谷市教育委員会
早稲田大学



HP

問 合 せ TEL 0495-71-6878 FAX 0495-71-6879 E-mail hwmm@city.honjo.lg.jp

写真[左]横綱板紙留短甲[右上]五鈴楕円形鏡板付轡(鏡板)[右下]五鈴楕円形鏡板付轡(引手)/四十塚古墳出土(深谷市)

児玉・深谷地域の古墳

古墳時代前期（3世紀後半～4世紀中葉）

児玉・深谷地域では、古墳時代前期前半から方形周溝墓・前方後方形周溝墓とも呼ばれる小型・低墳丘の方形墳や前方後方形墳が築かれていました。神明ヶ谷戸古墳（美里町）は前期末葉の小型方形墳で、水晶製や碧玉製の玉類が発見されています。前期中葉になると全長60mの前方後方墳、鷲山古墳（本庄市）が現れ、以後本格的な古墳が築かれるようになります。前期後葉には全長約70mの前方後円墳、前山1号墳（本庄市）が築造されます。これら大型古墳の副葬品は明らかになっていませんが、諏訪山丘陵の西裾に位置する直径40mの円墳、長坂聖天塚古墳（美里町）では6基の埋葬施設が検出され、銅製菱雲文方角規矩鏡、同獣形鏡、鉄製刀剣、同刀子、石製刀子形模造品、ガラス製小玉などが出土しています。

古墳時代中期（4世紀後葉～5世紀）

古墳時代中期前半は墳丘規模が最も大型化する段階です。公卿塚古墳・金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳（本庄市）はいずれも直径60m以上の大型円墳です。これら三古墳の中心埋葬施設に確実に伴う副葬品は知られていませんが、生野山將軍塚古墳の墳丘裾部からは、板石組合式の箱形石槨が検出され、鉄刀・鉄鎌・鉄斧が出土しています（埼玉県教委蔵）。中期後半には群集墳の造営が始まり、多くの小型円墳が築かれますが、低墳丘であるため埋葬施設ともども削平・消滅している場合がほとんどです。副葬品は鉄鎌・鉄刀剣などの武器類、鎌などの農具、石製・ガラス製玉類が出土しています。規模の大きな円墳では、四十塚古墳（深谷市）のように短甲や馬具などをもつ例も存在します。

古墳時代中期には、石製・土製模造品を用いた祭祀が盛行しました。石製模造品は古墳の副葬品としても出土しますが、こぶヶ谷戸遺跡（美里町）や猪山遺跡（深谷市）では、人・馬・盾など多量の土製品が出土しています。猪山遺跡では実物の馬歯も出土していることから、土地の境界や交通路に伴う祭祀の場であったと考えられています。

古墳時代後期（6世紀）

荒川の兩岸や神流川右岸の段丘上でも古墳の築造が活発化し、鹿島古墳群（深谷市）、塚本山古墳群（美里町・本庄市）などでは後期から終末期にかけて高密度な群集墳が形成されます。また、埋葬施設は竪穴系の石槨や木棺直葬に代わって、横穴式石室が一般化していきます。とくに小前田古墳群（深谷市）や青柳古墳群（神川町）では、群馬西部地域とともに、東日本では最も早く、後期初頭段階から横穴式石室の導入が始まっています。

副葬品は鉄製武器類や石製・ガラス製玉類が質量ともに増加し、一部の有力古墳には諏訪林古墳（美里町）のような金銅装の大刀や青柳古墳群南塚原60号墳のような小札甲が副葬されています。黒田1・4号墳（深谷市）、見目1号墳（同）などのように荒川左岸の段丘上に立地する古墳では騎乗用馬具の出土が目立ちます。

古墳時代終末期（7世紀）

日本列島の各地で前方後円墳の造営が終焉する7世紀初頭以降のから古墳そのものがほぼ築造されなくなる7世紀末葉頃までを古墳時代終末期と呼称しています。歴史学でいう飛鳥時代とほぼ年代が重なります。前方後円墳に代わる終末期の首長墓には、前原愛宕山古墳（深谷市）のようなやや規模の大きな方墳が採用されています。

横穴式石室をもつ円墳の築造は、後期に引き続いて盛行しますが、新たに丘陵の奥部や山地に築造される古墳も現れます。上武山地に沿った丘陵上に立地する宮内1号墳（本庄市）は、直径11m余りの山寄せ式の墳丘をもつ典型的な終末期の円墳で、切石積の横穴式石室から方頭大刀、鉄鎌などが出土しています。とくに、方頭大刀は後期に流行した金銅装の拵付大刀とは一線を画する装飾大刀で、初期律令制のもとで、地域の有力者層を国家的軍事組織に編成する目的をもって配布された大刀であるとされています。なお、青柳古墳群南塚原72号墳では、追葬に伴って副葬されたと考えられる8世紀代の小札甲が出土しています。

（本庄早稲田の杜ミュージアム 太田博之）

本庄市域の古墳と副葬品（本庄市）

古墳時代前期の本庄市域では鷲山古墳、前山 1 号墳など有力な前方後方墳や前方後円墳が築られますが、埋葬施設は未調査であるため副葬品の内容は判明していません。前期後半の浅見山 I 遺跡 8 号周溝墓では碧玉製管玉、下野堂 10 号周溝墓では石製釧（埼玉県教委蔵）が出土しています。

古墳時代中期は公卿塚古墳、金鎖神社古墳、生野山將軍塚古墳など直径 60 m 台の大型円墳が相次いで築造され、墳丘規模が最も大型化する段階です。一方、中小規模の古墳では、一辺 25 m の方墳である中期初頭の万年寺つつじ山古墳の墳丘盛土内から刀子・板状斧・袋状斧・鎌などの石製模造品（常設展示）が検出され、直径 40 m の円墳である万年寺八幡山古墳では、板石組合式箱形石槨の内部から鉄剣が出土しています。また、児玉町秋山所在の古墳から出土したとされる尚方作神人歌舞画像鏡の拓影（諸井興久氏旧蔵）も伝えられています。



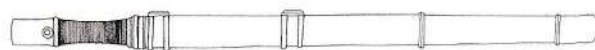
万年寺八幡山古墳の板石組合式箱形石槨

中期後半段階になると、小型円墳を主体とする群集墳の形成が始まります。小型円墳の多くは低平な墳丘であったため内部の埋葬施設は墳丘とともに削平・消滅している場合がほとんどですが、墳丘裾部や周堀内、古墳周辺などにも簡易な埋葬施設が存在し、少量の副葬品が検出されることがあります。典型的な中期末葉の群集墳である西五十子古墳群や東五十子古墳群では、周堀内の土坑などから鉄製直刀、鉄鎌、鉄製直刃鎌、碧玉製管玉などが出土しています。

古墳時代後期になると再び前方後円墳が築造されはじめるとともに、埋葬施設として横穴式石室

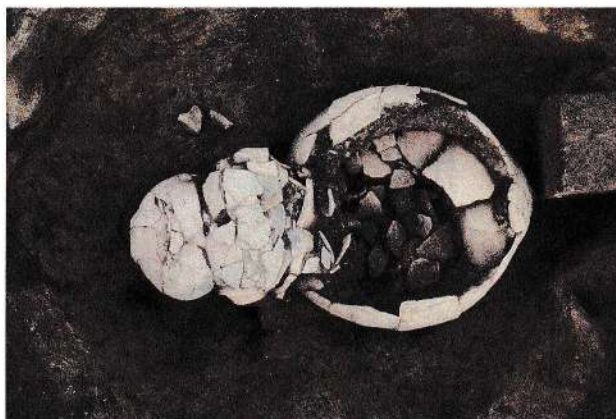
が導入されはじめ、やがて後期後半段階にはほとんどの古墳で採用されるようになります。また副葬品に鉄製の小札甲、金銅装の装飾大刀や馬具のほか銅製釧、金銅その他の金属製耳環、碧玉に加え水晶・瑪瑙・琥珀・ガラスなどの各種玉類、須恵器などが加わり品目が多様化します。

古墳時代終末期に入ると前方後円墳の築造が終焉し、副葬品の内容も金銅装の大刀や馬具が減少するなど徐々に簡素化していきます。児玉町飯倉の上武山地北端に立地する宮内 1 号墳は、直径約 11 m の山寄せ式の墳丘をもつ古墳時代終末期の典型的な小型円墳で、切石積の横穴式石室から方頭大刀・小刀・刀子・鉄鎌が出土しています。とくに、方頭大刀は中央の官営工房で生産され、地域の有力者層を国家的軍事組織に編成する目的をもって配布された大刀で、国家による武器の生産と管理を象徴する器物とされています。



宮内 1 号墳出土方頭大刀復元図

このほかに、古墳の周辺に存在する特殊な副次的埋葬施設として土器棺や円筒埴輪棺があります。旭・小島古墳群の林 8 号墳の近くでは、複数の大型土師器壺で構成された古墳時代中期の土器棺墓が発見されています。長沖 196 号墳の墳丘裾部からは、3 個体の円筒埴輪を組み合わせた古墳時代後期の円筒埴輪棺が検出されています。



旭・小島古墳群林地区 1 号土器棺

（本庄早稲田の杜ミュージアム 太田博之）

神明ヶ谷戸古墳と諏訪林古墳（美里町）

美里町には深谷市との境界である山崎山・諏訪山丘陵や松久丘陵、町の中央を流れる志渡川・天神川流域の微高地上に古墳時代前・中期の古墳が数多く分布します。後・終末期になると南部の丘陵上にも墓域が設定され大規模な群集墳が形成されます。

神明ヶ谷戸遺跡

神明ヶ谷戸遺跡は上武山地から派生する標高約120 mの松久丘陵上にあった遺跡で、昭和54年の発掘調査で弥生時代中期の環濠集落が発見されたことで知られています。古墳時代の遺構としては、方形周溝墓7、円形周溝墓（円墳）1、周溝を伴わない木棺直葬墓1が検出されています。このなかで8号周溝墓とされた墳墓は、高さ約2 mの盛土の残存が確認され、神明ヶ谷戸古墳とも呼称されています。

神明ヶ谷戸古墳の墳丘は、20 m×18 mほどの北東—南西方向に長い長方形で、高さ2 m以上の規模があり、周囲に幅約2.5 mの周溝が巡っています。墳丘西側の周溝内では多くの礫が検出されていることから、墳丘斜面には部分的に葺石が施されていた可能性があります。周溝からは有段口縁の壺形土器と考えられる土師器の細片も出土しています。

埋葬施設は墳頂部に設けられた木棺直葬土坑4基で、このうち中心埋葬施設と考えられる土坑から碧玉製の勾玉と管玉、水晶製勾玉、琥珀製棗玉などが出土しました。築造年代は古墳時代前期末葉の4世紀代と推定されます。

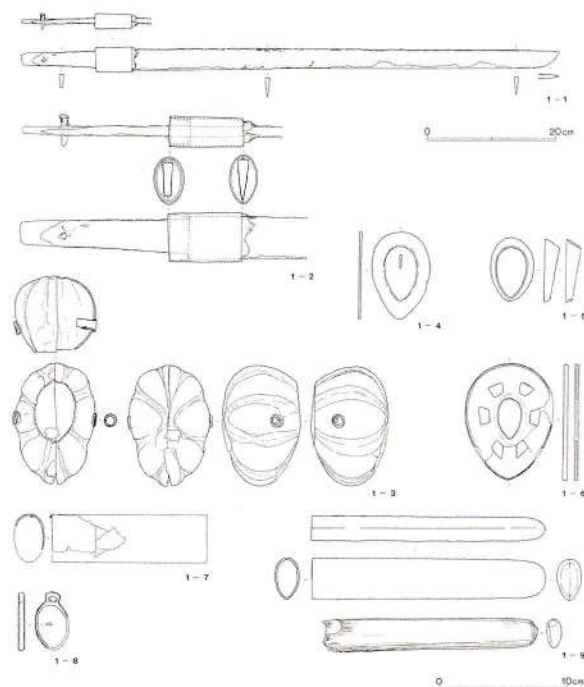
諏訪林古墳

諏訪林古墳は直径24.4 m、高さ2.1 mの円墳で、上武山地から派生する松久丘陵の末端に形成された地溝帯に立地し、周辺は南側の羽黒山と北側の天神山に挟まれた谷状の地形となっています。墳丘には葺石があり、周囲には幅3 mほどの周堀が巡っています。埋葬施設は南南西方向に開口する凝灰岩切石積の両袖式胴張型横穴式石室で、全長5.95 m、玄室長4.05 m、奥室幅1.3 m、羨道長1.9 mの規模があります。

大正時代に開墾が行われ、その際に出土した遺

物として金銅装頭椎大刀、銅製六鈴釦、銅製釦、鉄製直刀、鉄鏃、鉄製兵庫鎖、鉄製刀子、各種石製勾玉、耳環、石製やガラス製の丸玉や小玉などが伝わっています。また、平成4（1992）年度には、土地改良事業に伴って発掘調査が実施され、石室の床面から鉄製直刀、鉄鏃、鉄製刀子、琥珀製棗玉、石製白玉、耳環、ガラス製小玉などが出土しています。

頭椎大刀は、鉄製の刀身以外の装具はすべて金銅製で、縦畔目で懸通孔に鷲目金具を嵌め込んだ二枚合わせの柄頭、柄頭切羽、柄頭縁金具、六窓透鏑、釦、鞘口金具、鞘中、足金物、鞘尻などが残り、打ち出し施文による柄間の金銅製装飾板と一部の足金物は失われています。



金銅装頭椎大刀実測図

児玉・深谷地域では、諏訪林古墳の頭椎大刀のような装飾付大刀の出土は珍しく、貴重な資料となっています。古墳の築造年代は、後期末葉から終末期初頭にかけての時期と推定されています。

なお、今回の展示では、大正時代の開墾に伴って出土した資料は「伝諏訪林古墳出土資料」として展示しています。

（美里町教育委員会 池田匡彦）

青柳古墳群（神川町）

青柳古墳群は、神流川によって形成された河岸段丘上に立地していて、6世紀から7世紀後半まで築られました。便宜的に南側から城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮・南塚原・北塚原・植竹・関口・元阿保・四軒在家、白岩丘陵上にある白岩支群の11支群に分けられています。古墳の総数は約300基存在していたとされていますが、現在確認できるのは約80基です。

展示している副葬品は、青柳古墳群南塚原支群の古墳から出土したものです。南塚原支群は、古墳跡と考えられるものも含めて93基の古墳が密集しています。これまでに部分的な調査を含め52基の古墳が調査され、青柳古墳群の中では最も調査数が多い支群です。

南塚原 10 号墳

南塚原 10 号墳は、墳丘規模が約 19 m の円墳で、調査では周溝は確認されませんでした。埋葬施設は、南南西方向に開口する両袖型横穴式石室で、玄室は基壇状石積みの上に構築され、羨道部より 30 cm 高くなっています。石室は全長 6.9 m、玄室長 4.4 m、奥壁幅 2.6 m、羨道長 2.2 m の規模があります。原位置を保つ埴輪はありませんでしたが、円筒埴輪や形象埴輪が出土しています。

副葬品は盗掘の影響をあまり受けておらず、比較的良好に残っていました。数多くの出土した副葬品の中でも注目されるのは、象嵌装大刀です。この大刀には、刀身に日輪形や魚文、鐔に C 字状文を施しています。刀身に日輪形や魚文を施す大刀は全国的にも類例が少ないものです。

築造年代は、円筒埴輪の形態や副葬品から 6 世紀末と推定されます。



南塚原 10 号墳出土 象嵌装大刀

南塚原 60 号墳

南塚原 60 号墳は、墳丘規模が約 17.5 m の円墳で、墳丘の周りには周溝が巡っています。埋葬施設は南西方向に開口する胴張りの両袖型横穴式石室で、1次石室と2次石室の2つの石室が確認されています。1次石室は、玄室長約 4.1 m、最大幅 1.8 m、羨道長 2.25 m で、2次石室は1次石室を破壊し、構築されています。玄室長 4.1 m、最大幅 1.9 m、玄門幅 1.05 m、羨道長 2.25 m で、1次石室とほぼ同じ規模で構築されていました。

副葬品はすべて2次石室から出土していて、耳環、鉄鏃、小札、勾玉、切子玉、ガラス小玉などがあります。築造年代は、石室の形態、副葬品などから7世紀前半と推定されます。

南塚原 72 号墳

南塚原 72 号墳は、調査前に削平を受けていて、墳丘がほとんど残っていませんでした。調査の結果、墳丘規模が 14.5 m 以上の円墳で、埋葬施設は、南方向に開口する白色凝灰岩の切石積の胴張りの両袖型横穴式石室であることがわかりました。石室は全長約 6 m、玄室長 4.2 m、奥壁幅 1.9 m、羨道長が約 2.6 m の規模であったと推定されます。凝灰岩の切石を使用した石室は、青柳古墳群内で調査された古墳の中では、72 号墳 1 基のみです。

副葬品は、盗掘や削平の影響で原位置を保っていませんでしたが、象嵌装柄頭、鉄鏃片、小札が出土しました。



築造年代は、石室形態から7世紀中頃と推定されます。出土した小札は形態などから8世紀中頃のものと考えられ、追葬で納められたものです。

南塚原 72 号墳出土
象嵌装柄頭

（神川町教育委員会 北山直人）

浅間山古墳と帯刀古墳群・地神塚古墳(上里町)

上里町には本庄市から広がる旭・小島古墳群の最西端を形成する神保原支群や三田支群があり、町の西側を流れる神流川に沿って大集落を形成している五明遺跡群の墓域として、神流川から若干離れた帯刀の微高地上に古墳時代後期の古墳が数多く分布し、帯刀古墳群を形成しています。

浅間山古墳

浅間山古墳は本庄市から広がる旭・小島古墳群の中のひとつとして上里町大字神保原町に所在しています。昭和63(1988)年～平成元(1989)年の3回にわたり上里町教育委員会で遺跡保存整備事業として石室内の発掘調査を実施しました。

現状は東西27m、南北26m、高さ5m程墳丘が残されていますが、周辺の状況からももとは直径38m、高さ6m程の円墳と考えられます。石室は南に開口する胴張両袖型横穴式石室で、前庭部を有し羨道部は長さ3m、幅1.2m、高さ1.8m、玄室長は長さ6.48m、幅2.2～2.4m、高さ2.5mありました。石室の壁は5面を面取り加工した角閃石安山岩の河原石が使われ、天井石には6枚の緑泥片岩が架構されています。石室内の棺床面には角閃石安山岩の削り欠片が5cmほど敷き詰められていたことから、河原石の4面を面取りして互目積とし、最後に石室内面に現れる面を加工したと考えられています。副葬品は玄室内から鉄製直刀、鉄鉾、刀装具、鉄鏃、勾玉、耳環、平瓶、銅甕が検出され、前庭部からは提瓶が出土しています。

帯刀古墳群

帯刀古墳群は神流川の縁辺部にある上里S A建築事業に伴う発掘調査が実施された若宮台遺跡から、上越新幹線建築事業に伴う発掘調査が実施された高野谷戸遺跡までの間の南北約500mの範囲の中に展開されている大集落である五明遺跡群の墓域と考えられています。東西800m、南北1kmの範囲の中に、昭和45(1970)年の分布調査で34基の古墳が確認され、現在までに7基の古墳の調査が実施されています。形状はいずれも径15～25m程の円墳で神流川の河原石を使った模様積の横穴式石室が検出されています。

地神塚古墳

地神塚古墳は平成19(2007)年上里西部地区県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施されました。東西11m、南北12.8m、高さ2mのやや方形を呈した墳丘が残り、墳頂には柵の木の下にこの古墳の名前の由来となっている石祠が祀られていました。

石室は南に開口する模様積の両袖式胴張型横穴式石室で、主軸方向はN-6°-Eでした。内部は西壁の中央部をのぞいて保存状態は良好で、羨道部は羨門部が不明ですが、長さ2.24m、幅0.58～0.65m、玄門部は幅が0.8m残っていました。

玄室は長さ3.96m、幅は中央部よりやや奥壁寄りが最大で1.57m、奥壁は幅1.05m、棺床面から高さ1.63mが確認されました。玄室の内壁は奥壁が2列の大きな河原石を主として、その隙間を中小の扁平な河原石で埋めており、主体となる河原石は側壁に比べてさらに大型の石材がわれていました。最大の河原石は幅56cm、高さ35cm、奥行き33cm、側壁は袖石が両側ともに6段残存し、幅10～20cm、厚さ2cm、長さ15cmほどの扁平な小判形の河原石を主として、幅20～30cm、厚さ10～20cm、長さ20～30cmの大型の河原石を組み合わせて模様積としていました。この石組に特別な規則性は認められませんが、水平方向は奥壁に接する8段の石組と垂直方向は奥壁から袖部までの根石である10段の石組が基準と考えられ、水平方向は35cm前後、垂直方向は20cm前後の交点に大きめの石が配置されています。



地神塚古墳玄室東壁部断面

(上里町教育委員会 丸山 修)

深谷市域の古墳と副葬品（深谷市）

四十塚古墳出土の短甲と馬具

四十塚古墳群（岡）は、標高 50 m 前後の櫛挽台地北縁に位置する古墳群で、古墳時代前期後半から終末期にかけて築造された 100 基前後の古墳によって形成されていたと推定されています。

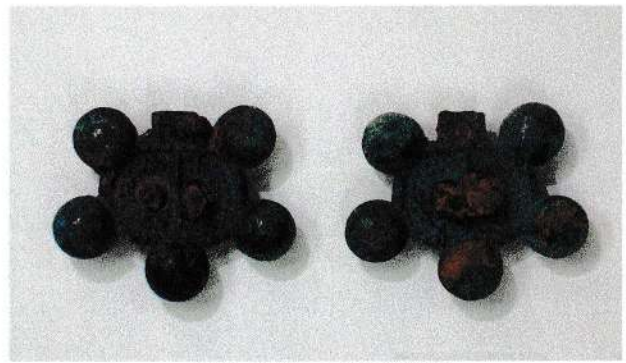
四十塚古墳はすでに墳丘を失い、墳形や規模の詳細は不明ですが、昭和 7（1932）年に開墾された際に^{たてあしきせつかく}竪穴式石槨もしくは^{れきかく}礫槨と考えられる川原石積みの埋葬施設が発見されました。内部からは鉄製横矧板^{てつせいよこはぎいたびょうどめたんこう}鋌留短甲^{どうせい くれい だ えんけい}、銅製五鈴^{ごしん}楕円形鏡板付轡^{がみいたつき}、同三鈴杏葉^{さんれいぎようよう}、鉄製楕円形鏡板付轡^{てつせい だ えんけい}、珠文鏡^{しゅもんきよう}、鉄製の大刀・鏃・袋状斧、鑿・鉈・刀子などが出土したとされ、このうち短甲、五鈴鏡板付轡、楕円形鏡板付轡と鉄製品の一部が現存しています。

横矧板鋌留短甲は、打ち延ばして裁断・成形した鉄板を鉄鋌で留めて組み上げた甲で、古墳時代中期を代表する副葬品のひとつです。上下端部には鉄包^{てつぷく}覆輪が施され、着脱のため右前銅が開閉する構造になっています。本資料の最大の特徴は、



鉄製横矧板鋌留短甲

五鈴楕円形鏡板付轡は^{ちゆうどうせい}鑄銅製で、鏡板本体と^{はみ}銜止め、鏡板周りの 5 つの鈴が一体につくられ、鈴の内部には石製の丸が入れています。銜は振りをもつ二連銜であったと推定されています。銜の外環と引手は遊環を介して鏡板の外側で連結しています。引手は一条線引手で、別造りの壺をもっています。現在は所在不明ですが、伴出の三鈴杏葉はこの轡と一組になる資料です。



銅製五鈴楕円形鏡板付轡

楕円形鏡板付轡は、厚さ 2 ミリの鉄板を成形して外形を造り出し、^{たちぎきこう}立間孔と^{はみどめこう}銜止孔を開けています。楕円形鏡板付轡は鏡板の片側が内湾する「ソラマメ」形を呈することが一般的ですが、本例はほぼ直線を成して楕円形を呈しています。銜は中位が太い二連銜で、引手は屈曲する壺をもち、銜とは遊環を介し鏡板の外側で連結しています。

これらの出土遺物から、四十塚古墳の築造年代は古墳時代中期後葉、5 世紀後半と推定されます。

黒田古墳群・見目古墳群出土の副葬品

深谷市南部の荒川流域では左岸の小前田古墳群（小前田）^{くろだ}、黒田古墳群（黒田）^{おまえだ}、右岸の鹿島古墳群（本田）^{かしま}など後・終末期の円墳を主体とする大規模な群集墳が形成され、鉄製の武器、石製の^{せきせい}ガラス製の玉類を中心に豊かな副葬品を出土することで知られています。また、黒田 1 号墳では実用的な鉄製環状鏡板付轡^{かんじよう} 3、三角錐形壺^{さんかくすいがたつぽあふみ} 1、同 4 号墳では鉄製環状鏡板付轡^{てつ じ こんどうそうはんきゆうけい} 1 と鉄地金銅装半球形無脚雲珠^{むきくう ず} 3 が、下流の寄りの見目 1 号墳（田中）^{ぼれい}では銅製馬鈴^{ばれい} 2 が出土するなど馬具の副葬が目立つことが注目されます。

狛山遺跡の祭祀遺物

古墳時代中期を中心に、集落内部の特定箇所や河川、水路、道路など生活に関連するさまざまな場を対象に石製や土製の雛形を用いた祭祀が盛行します。かつて耕作中に多量の土製品が出土した^{わじなやま}狛山遺跡（今泉）^{いまいずみ}は丘陵を越える道路脇に所在することや京都国立博物館所蔵資料の中に馬歯が含まれることなどから地理的境界や交通路にかかわる祭祀の跡と考えられています。

（深谷市教育委員会 中林 昌）

児玉・深谷地域の 主な古墳・古墳群

◆文化財展示施設

- 各市町の文化財展示施設
- 上里町
 - ◆1 上里町立郷土資料館
 - 神川町
 - ◆2 神川町中央公民館 第2 展示室
 - ◆3 神川町 多目的交流施設 展示室 2・3
 - 本庄市
 - ◆4 日本庄商業銀行煉瓦倉庫 展示スペース
 - ◆5 本庄早稲田の社ミュージアム
 - ◆6 競進社模範蚕室
 - ◆7 楠保己一記念館
 - ◆8 文化財整理室 文化財展示コーナー
(不定期開催)
 - 美里町
 - ◆9 通跡の森館 考古資料常設展示室
 - 深谷市
 - ◆10 沢沢栄一記念館
 - ◆11 日本煉瓦史料館
 - ◆12 川本出土文化財管理センター

